

フォークオペラ《幸せのパゴダ》 ストーリーと音楽構成について

フォークオペラ《幸せのパゴダ》はある地方の音楽劇団の物語である。公演を目前にして大水害に出会い、稽古場として使っているお寺が取り壊されることになって、解散やむなしという現実に向き合った音楽劇団7名の人間模様を描くアンサンブルオペラ。その寺にはなぜかパゴダのミニチュアが安置されており、激戦で泥に埋もれて果てた男の霊が籠もっている。彼は戦前作曲家だったらしい。水害とともに蘇った霊は不思議な存在となつて、危機に瀕した劇団の内紛を一部始終見届け、個性丸出しでまとまりのない歌手たちのそれぞれを導いて最後の3日間の稽古を成立させ、音楽を通して不思議な調和を達成していく。

アリアのように歌われる歌と、劇の展開に沿って、あるいは劇を引き出すように現れる機能的な音楽やモチーフを紹介する。

第一場 『パゴダのモノローグ』

冒頭に、全楽器がユニゾンで、パゴダの運命を示すような1小節のモチーフ①が、フォルティシモで演奏され、次いでパゴダ自身の紹介が歌われる。

① <楽器> <パゴダ>



パゴダ と人は僕を呼ぶ

それを受けた①Aの1小節目は逆行音型で、パゴダを過去に連れ戻す。

①A <楽器> <パゴダ>



古いお寺のお堂の中から

彼は太平洋戦争中、南方の惨めな戦いで、泥に埋もれて一命を失ったのだ。パゴダの魂は像に閉じ込められてこの町に帰り、このお寺の一角からずっとこの町の人々の暮らしを眺めてきた。パゴダは先日この町を襲った洪水で、またもや泥に呑み込まれて何も見えなくなった宿命を歌い、折りのモチーフ②を織り交ぜた合唱をバックに、ひたすら神に祈る自分の境遇を告げる。

②



う

かくの如く、モノローグとはいえ強く、一種の宗教的カンタータが展開される。舞台は一転して、

第二場 稽古場

お寺の本堂を稽古場にしている音楽劇団の集まり。ありきたりな座長の能書きにみんな勝手なことを言う。オカマのプリモが、おかしげな節回しで、

③ <プリモ>



あら—あおいしいわ—あお水 どうもありがとう

と歌うように反応するので、座長の訓示もアリア風になる。

④ <座長>



本番まであと一週間でも洪水が来てから
今日まで全たく稽古はでき—なかった

水害で劇場の復旧のめどが付かない上に、座付きの作曲家が最後の部分を書けていないこともバラされる。みんな歌手だから、反応はやはり喧々諤々の歌になってしまう。作曲家はうなだれて

⑤ <作曲家>



すいません 努力したんですが やっばり

座長は、市の通達で、住職のいないこの廃寺は3日後に取り壊しが決まったことを告げる。座員たちは一瞬沈黙するが、それぞれさらに勝手な旋律の応酬になる。ポチは「じゃあ公演は中止!」、ケリーは「予算からいって当然」、プリモが「私の歌が聴けなくてお客さまは残念」というのに、プリマは鼻で笑って「暗譜が間に合わなくてホッとしているんでしょう?」等々。ポチが「これで解散!」というのに、新人のヒバリが「折角あそこまで稽古したんだし」と抵抗する。同意見の座長が切々と訴える。

⑥ <座長>



なあみんな最後の三日間
これまでの全てを賭けて稽古しようや

自分の家の復旧もままならないポチは「馬鹿な!」と座長とつかみ合いの喧嘩になる。

⑦ <座長>



ヘラヘラとはなんだ!

と座長の歌う旋律がPfで増殖するのに他の楽器も参戦。その騒ぎを、こういう時にはなぜか役に立つプリモが一喝、プリマに劇団代表としての意思を問う。そして三日間、自由参加で稽古だけ、本番なしと決まってみんな帰り、便所掃除をして帰るといふヒバリだけが残る。

第三場 一日目 便所

ヒバリがひとり、アリアを歌う。

⑧ <Cl> <Vn>

<ヒバリ>

父 さん は 町 から 出 て 行 っ ち っ た

ア タ シ が う ち に ー ー ー 生 ま れ て き た か ら

歌い終わったとき、パゴダが現れる。「お化け！」と腰を抜かずヒバリに、パゴダは「僕は人間だ！」と自己紹介。「僕は君たちの舞台のことをよく知っているよ。唄って、踊って、お芝居して、

⑨ <パゴダ>

見 て 楽 し か っ た ず っ と 羨 ま し っ た

君 た ち が 大 好 き だ っ た

なにかよくわからないまま、ヒバリは劇団の危機を訴え、パゴダは自分の運命を思い出して歌いながら「あと三日、この世を去る前に神様がチャンスくれた」と唄いつづける。

⑩ <パゴダ>

困 っ て い る 人 を ！ 涙 を 流 し て い る 人 を

祈 る こ と し か で き な い 人 を ー ー ー 彼 ら す べ て の 力 に

な り た い ン だ ！ そ れ が 僕 の ゆ め だ っ た ン だ (夢)

気味悪がって去ろうとするヒバリに、パゴダは追いかけるように歌う。
「困っている仲間を連れておいで、ヒバリ待ってる」

第四場 一日目 稽古場

全員集まって発声練習しながら、それぞれ勝手。曲が書けない作曲家はピアノで音取りしている。ポチは集中を欠いて座長に叱られ、切れる。プリモがとりなすが、逆にオカマ呼ばわりしてポチは帰る。ケーリに悪しざまに言われてプリマも御託を述べて去る。そういった状況を各楽器が巧妙にあしらっていく。座長は、

⑪ <座長>

さ あ 今 日 は 解 散 だ 明 日 も

稽 古 場 を 開 け て 待 っ て る か ら

と去っていくみんなに歌いかけるしかない。

第五場 一日目 便所

ポチを慰めようと便所に駆け込んだヒバリはパゴダに出会う。ポチもやって来て、いい声で発声練習中のパゴダをつまみ出そうとする。逆にパゴダに「音痴なんだって？」と言われ逆上したポチが歌う、

⑫ <ポチ>

そ う さ 音 痴 音 痴 俺 は ー ー 音 痴

ド レ が ド の 音 ? ミ レ ば ソ の 音 ?

ミ レ ば ソ の 音 ? こ れ じ ゃ ー ー わ か ら ン !

子供の頃から大声での音痴ぶりに、先生ぶったヒバリが御注意！「だけど音痴」と聞き直してポチの大声礼賛の歌は続く。パゴダも父親ぶって「家業を継がせる」というのに、「音大に行ってオペラ歌手になる」とまで乗ったポチ。結局求人広告でこの劇団に来て得意のバク転で成功。ポチとヒバリとパゴダの三重唱で「ポチこそこの世で一人！バク転しながら歌う歌手！」「進め音痴、ポチは音痴！」と乗りまくる。パゴダは歌う。

⑬ <パゴダ>

そ し て お 前 の 歌 が 他 の 誰 か を 幸 せ

に す る 僕 は お 前 が 羨 ま ー ー し い

だが、ポチの親父は洪水で酒屋もろとも泥に埋もれた。

⑭ <ポチ>

あ の 土 砂 崩 れ の 起 き た と き 俺 は ー ー そ の と き こ こ

で 踊 っ て ー ー い た

ポチは無言で去るが、パゴダには止められない。

間奏曲 1

ロト・トムのオスティナートを伴って歌うClの物憂いメロディーを、高音のVnが励ますように支え、掛け合う短い間奏曲。

⑮ <Cl>

第六場 二日目 稽古場

ポチとプリマが来ない中で、稽古がやれる、やれないで揉める。情けない連中に座長は、

16 <座長>

な に言っただよ どうしやったんだ え？

なんでそんな なんだお前ら

と論すが、ケーリは座長のおセンチな精神主義ではやっていけない、功労者だって切れと言いたい放題。

17 <ケーリ>

作曲家は 曲が _____ 書けな

い プリマは _____ 唄 え な _____ い

立ち聞きしていたプリマは踵を返す。ヒバリが追う。

第七場 二日目 便所の脇

追って来たヒバリが「男子便所に一緒に行きましょう」と言うのに呆れたプリマと争っている時、便所の中から歌がきこえる。

18 <バゴダ>

ラ ラ ラ ラ ラ ラ ラ ラ ラ ラ ラ ラ

だま っ て ど こ か に _____ 寄 っ て こ か な

う ち じ ゃ み ん な で 待 っ て る か な

か え り が お そ い と し か ら れ る か な か な カ ナ カ ナ

カ ナ カ ナ カ ナ の 時 に は よ し た ほ う が い い か な
永六輔作詞、三木稔作曲《かなの歌》

つい二人も加わって歌い始める。プリマのラジオ・デビュー曲で、ヒバリも聞き知っていたのだ。プリマは回顧してアリアを歌う。

19 <プリマ>

む か し む か し 遠 い む か し の こ と
(昔)

私 も 若 く 仲 間 も 大 勢 居 た

遠 い 遠 い 昔 の _____ は な し
(話)

追って来たケーリもアリアを歌う。

20 <ケーリ>

あ ん た の た め に 努 力 し た ア タ シ も 最 初 は

唄 い た か っ た ア ン タ み た い に な り た _____ か っ た

そして「お世話になりました さようなら」と言って去る。プリマが現れて稽古を再開しようという。

ポチが帰ってきたのだ。ヒバリはバゴダの不思議な力でみんなが素直になっていくので劇団に入るよう勧める。バゴダは、それは出来ないが歌を教えるという。

21 <バゴダ>

つ め く さ ひ と も す よ る の ひ ろ ば む か し の

ラ ル ゴ を う た い か わ し く も お も

ど よ し よ か ぜ に _____ わ す れ て _____

と り い れ ま じ か に と し よ う れ ん
秋浜信史・三木那子作詩、三木稔作曲《ひろばのうた》

ヒバリも歌い、途中からデュエットになる。バゴダは便所に帰ろうとし、ヒバリは「あなた本当は誰？」といぶかる。バゴダは「明日ね」と去る。

間奏曲 2

《ひろばのうた》が違った趣に編曲された器楽で演奏される。

第八場 三日目(最後の日) 稽古場

全員が集まって次の演目の稽古。病気になった子供の寝室。ヒバリは子供、プリマは子供の母、座長はヤクザ、ポチはチンピラ、出来の悪い下手糞な歌と芝居。途中で現れたプリモは歌舞伎風の扮装で、

22 <プリモ>

弱 き を 助 け 強 気 を く じ く _____ この 横 暴 を

見 捨 て て お け る も _____ か あ _____

と勝手なカデンツァを延々と。「やめろ！」と座長に止められたあと、それぞれが勝手なことを言って稽古場は無政府状態になる。予先が作曲家に向かったのをきっかけに作曲家がついに切れる。飛び出した作曲家は灯油の缶を持ってきて、中身をあたりかまわず撒く。「出てケ!!!」と手にライターを持って、

23 <作曲家>

この 稽 古 場 は _____ 僕 の も の だ _____ !

と強烈な告発、いやアリアを歌いだす。でも最後には「もう僕は書きたくても、書けない」との告白になって、「火をつけるぞ、楽器と心中するぞ！」と脅す。「マジでやべーよ」と皆外に出ようとするのをヒバリがトイレに誘導する。この景、打楽器が、切ればはじめからの作曲家の心理を秘術を尽くして代弁する。

第九場 三日目 トイレ

ヒバリたちが来て、座っているパゴダに楽器や稽古場が危ない、寺も危ない、助けて！と懇願する。パゴダの、



の一言に、全員息を呑み、誰も何も言えなくなってしまった。パゴダは「さあ、作曲家も、楽器も、稽古場も全部助けましょう！」といてみんなを座らせ、

口笛を吹き、手足を使わせて生命力を感じさせるリズムを刻み、そして昨日ヒバリに教えた《ひろばのうた》を二人で歌い始める。やがて合唱になって皆は音楽に没頭していく。まるで阿波踊りのように体を動かしながら。プリマやヒバリのソロを聞きながらパゴダはそっと立ち上がり、愛しそうに彼らを見つめながら、闇の中に消えていく。

ケーリが入ってくる。慌てて稽古場にダッシュしようとする皆を止めて、作曲家と楽器などの安全を告げる。プリマはケーリの出戻りを「懲りないわね」と愛で、ヒバリのいい声に驚いてみせる。そして稽古場とのお別れに向かう。

間奏曲 3

Pfの空虚5度の平行和音をバックに、VnとClの対話は次のメロディーで閉じる。



第十場 数日後かつて稽古場のあった場所 更地。

ヒバリがモノローグでその後の成り行きを歌う。



抑えられた情緒が、却って唄い祈った場所への懐かしみを増幅させる。座長が報告の最初に、作曲家の動静について、



と歌うのを聞いて加わるケーリ・プリモ・ポチとの慌ただしい4重唱になり、プリマに制せられる。結局、中止になった公演の負債を加え、劇団の借金は『致命的』なこと、お寺の解体工事中にトイレの裏に小さな慰霊碑が見つかったことが判る。それはこの町の若者が兵士として沢山送られた南方の戦いで唯一生き残りだった住職が、仲間の魂を弔うために建てたもので、なんと！パゴダと呼ばれていた

のだ。

それが本山に送られて燃やされたと知ったヒバリは号泣する。

そこに作曲家が現れる。書けなかった最後の部分を書上げて……。食い入るように楽譜に見入っていた皆は「俺たちが唄えば、そこが劇場さ！」と一人ずつハミングで唄い出し、幻のパゴダのモノローグに引っ張られながら、最後に力強く未来を暗示しながら唄い切る。



【作曲家より】指定された、いくつかの歌やアリアは別として、この台本は、ストレートプレイの台本としてもそのまま使える。その完璧な演劇性に拮抗して、歌手たちが演じ、音楽が主導できる次元に作品の完成度を高めるには、高度なノウハウが必要である。私のフォークオペラ系列の作品は、「日本史オペラ8連作」のように全てが音符で書かれ、オケピットの指揮者のコントロール下に置かれるオペラと、多くは同じ書法で書かれている。

だが残る部分は、舞台上に設置された「楽座」に位置する楽器奏者（時に指揮者までも）たちが、即興的な雰囲気を持った楽譜に従いつつ、また、歌手たちのせりふの機微に応じつつドラマをあしらい、時に盛り立てる重要な役割をする。歌舞伎の下座音楽に少し似ているかもしれない。

また、歌舞伎の会話が特徴ある抑揚をもっているように、通常は歌う言葉でないセリフにも、役柄の特性に応じたメロディーが付けられている。そのコントロールされ、記録された旋律線が引金となって、劇全体に亘る他のセリフの抑揚にも印象的な統一感が生まれることを期待している。

尚、パゴダとは南アジア、特にビルマに多い仏塔。ビルマは親日的であったが、英印軍と戦った日本軍は太平洋戦争後半退勢の中で暑さ、マラリア、そして泥にまみれて悲劇を繰り返した（この方面に連隊が派遣された徳島県では、戦後徳島市を一望する眉山の頂上に、戦死者たちの冥福を祈って大きなパゴダが建設されている）。

このオペラは、住職であった慈父を神戸の大震災で亡くされた岩田達宗氏が、父へのレクイエムとして発想された真迫の台本を基としている。一方、終戦時15才で海軍兵学校予科生徒だった私は、戦争に起因する集団赤痢で8月15日は、死の床にいた。生き残った私は、あの無謀で悲惨を極めた戦争のなかで、飢餓地獄や自殺に等しい戦死、故なく空爆で散った数百万の人たちの霊に捧げるオペラを書きたいと願っていた。予想を超えた岩田さんの台本を得て、自分の命あるうちに希みに適う作品を完成することが出来た。この機会を与えてくださった故郷徳島県と飯泉知事に、心からの感謝を捧げたい。